特定非営利活動法人
タンチョウ保護研究グループ会誌
2014 年 3 月

巻頭言 ・・・1
十勝の大樹町でシンポジウムが開催されました ・・・2
国際ツルワークショップに参加しました ・・・4
釧路地区でのナベヅルの発見と越冬について ・・・5
冬季総数調査が行われました ・・・6
十勝の越冬地を調査しました ・・・7
「湿地之神」三部作が完成しました ・・・8
富山県に出現したタンチョウの顛末記 ・・・9
活動記録 ・・・10

TPPと日本の農業、そしてタンチョウの未来は？！

理事長　百瀬邦和

年度末の国会でも取り上げられていた TPP については、今後どのような展開になるのか、そして北海道の、特に道東の農業にどのような影響が現れるのか予想もつかないのですが、農業の変化がタンチョウに及ぼす影響を心配しているのはごく一部のツル関係者くらいでしょう。最近はタンチョウの調査で生息地を回っていると、離農したり、あるいは牛を飼うのを止めて牧草畑の管理だけをしているらしい「元」酪農家（牛飼い）が目立つようになってきました。「この辺では一軒に 1 つがいずつツルの家族が来ている」という話を聞くことが多いのですが、一方で牛飼い農家の数の減少が進んでいます。そうすると牛舎周辺を餌場として頼っているタンチョウの数も減っていくことになるのでしょうか？　残念ながら繁殖期に於いても牧場通いを続けているつがいが増えていることと、これまでの数の増加とは関係があるように思えるのです。北海道に現在の数のタンチョウを支えるだけの自然が残っているでしょうか。

私たちはタンチョウの生存を支えるための多様な生き物のいる自然を取り戻していくこと、そしてタンチョウが生息密度が低くなっても全体の数を減らさないように、生息分布が広がっていけるような準備を進める活動を始めていく必要があるかもしれません。

十勝の大樹町でシンポジウムが開催されました　百瀬邦和

本年３月１日に環境省北海道地方環境事務所と（公財）北海道環境財団の主催によるシンポジウム「十勝発。ツルと人との新しい関係。～地域とともに考える、タンチョウ分散の取り組み～」が大樹町生涯学習センターで開かれました。シンポジウムに先立ち環境省のタンチョウ保護増殖検討会が同じ会場で開かれました。５名の検討委員は午後のシンポジウムで、講演に続いて行なわれたパネルディスカッションにパネリストとして参加しました。

今回のシンポジウムは、タイトルにもあるようにタンチョウ分散化のための活動の第一歩として企画されました。タンチョウの将来のためには、現在釧路地方に集中しているタンチョウを北海道の広い範囲に分散させなければなりませんが、分散していく新しい地域では農業関係者をはじめ、都市生活者、行政などにも、定住しているタンチョウと向かい合った経験がありません。

十勝地方でタンチョウが分布を広げてきた歴史は比較的新しく、また釧路地方とは違って内陸部では麦などの換金畑作物が広く耕作されています。近年は十勝地方においてタンチョウによる農業被害を訴える声が多くなっているようです。そこで、既にタンチョウが多く生息するようになっていて、今後分散していくタンチョウが直面するであろう各種のトラブルが出始めている十勝地方をモデルケースとして、タンチョウと人とが共存していくための方法を模索していきましょう、というのが今回のシンポジウムの目的です。

開催にあたっての懸念は、地元の農業関係者を巻き込むことができるだろうかという点でした。主催及び協力団体の関係者間の事前協議により、地元酪農家のまとめ役であり大樹町町議会議員でもある阿部さんに日頃の思いを語っていただこうということになりました。関係者による趣旨説明のための会合を設けて阿部さんに協力をお願いした結果、今回のシンポジウムに参加していただけることになったわけです。

シンポジウム前半は話題提供として５つの講演が行われました。

◎タンチョウって、どんな鳥？　～生態と個体数について～：正富欣之（タンチョウ保護研究グループ副理事長）

タンチョウは道内全域に繁殖地が拡がったとしても 2,000 ～ 3,000 羽で頭打ちになると予想される一方で、事故や環境変化による生存・繁殖率の低下で減少に転じる可能性もある。十勝での繁殖・越冬状況とあわせて、野生生物としてのタンチョウの生態について紹介した。

◎市民とともに作るタンチョウ自然採食地　～鶴居村での取り組み～：有田茂生（元・日本野鳥の会鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリチーフレンジャー）

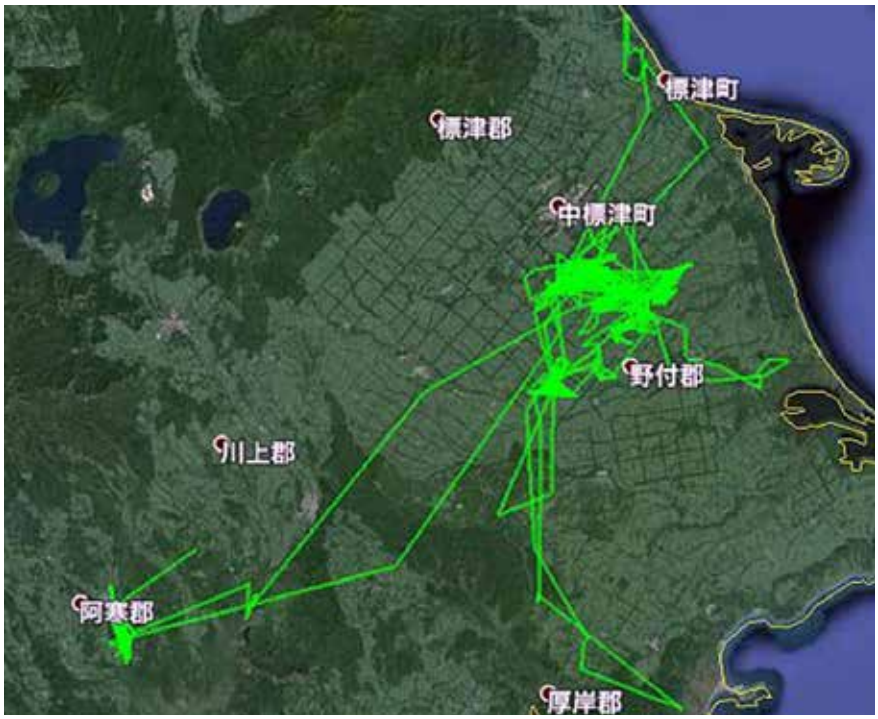
冬のタンチョウは給餌場だけで暮らしているわけではなく、周辺の自然環境が生息の鍵を握っている。鶴居村ではちょっとした工夫でタンチョウが使える場所となり、市民参加で環境改善に取り組みながら地域の環境を考えるきっかけにもなっている。今回はそれらの事例を紹介した。

◎酪農地帯のタンチョウ　～ツルオ君のこと～：百瀬邦和（タンチョウ保護研究グループ理事長）

2013 年 1 月に、鶴居村の給餌場に飛来したタンチョウの幼鳥 1 羽を捕獲し、位置情報を記録する装置を装着して再放鳥した。この冬、データの回収に成功し、子別れ後のタンチョウの行動の一端が明らかになった。この幼鳥の行動の詳細を報告した。

この幼鳥（通称：ツルオ君、186 番のリングも装着）は親と共に繁殖地周辺まで戻り、夏から秋にかけて釧路・根室地域を広範囲に移動しながら、冬に再び鶴居の給餌場に現れたことが分かった。

放鳥時の「ツルオ」君



ツルオ君の行動の記録（緑の線は滞在地点を順番に線で結んだもの）

◎十勝川での取り組み：佐々木靖博（国土交通省北海道開発局帯広開発建設部池田河川事務所計画調整係長）

十勝川では多くのタンチョウが繁殖している一方で、河川管理の上でさまざまな工事が欠かせない。繁殖や生息への影響を限りなく少なくするよう、タンチョウの生態について助言を受けながら、行程や工法の工夫で両立させている事例を紹介した。

◎ツルと歩む 50 年：阿部良富（酪農家・忠類農業協同組合理事）：

大樹町・生花苗沼のほとりで農業を営みながら、ツルをはじめとする多くの野生動物と共に歩んで来た経験から、さまざまな苦難を皆で乗り越え、知恵を出し合ってこそ、はじめて自然との共存が成り立つことを話した。

シンポジウム後半のパネルディスカッションでは、前半の 5 名の発表者にタンチョウ保護増殖検討会委員の黒沢信道（釧路地区農業共済組合総務部長）、正富宏之（専修大学北海道短期大学名誉教授）、松本文雄（釧路市動物園園長補佐）、小川巌（酪農学園大学教授）と、白井隆（湿原研究所所長）が加わり、小川氏の司会で意見交換が行なわれました。

十勝地方ではタンチョウと一緒に畑に現れるガン類やハクチョウ、さらにシカによる被害が多くあり、それらへの対策はタンチョウへの対応とも密接に関係していることが改めて指摘されました。

全体としては、今回のシンポジウムを第一歩として、立場の違うさまざまな関係者が発言の場を持ち、そうした機会をできるだけ多くもちながらタンチョウとの共存を図っていくことが大切であるという意見が多く出されました。

なお、タンチョウ保護研究グループはこのシンポジウムに対して、協力団体として参加しました。

国際ツルワークショップに参加しました　　松本文雄

ナベヅル・マナヅルの越冬地として有名な鹿児島県出水市で今年の1月17日・18日に国際ツルシンポジウムとワークショップが開催されました。百瀬邦和理事長、国際タンチョウネットワークの百瀬ゆりあ代表、日本ツル・コウノトリネットワークの松本が釧路から参加しました。

出水平野は約10,000羽のナベヅル、約3,000羽のマナヅル、その他に少数のクロヅル、カナダヅルなども越冬する日本最大のツルの越冬地で、特にナベヅルは世界の8割以上が出水平野で越冬すると言われています。また、多数のマナヅルが安定して越冬する場所も国内では出水平野だけです。

ナベヅルとマナヅルは北東アジアに暮らすツルで、中国東北部、ロシア東南部、モンゴル北西部などで繁殖しています。冬は日本、中国南部、朝鮮半島まで渡り、越冬します。生息数が少なく、希少鳥類（国際自然保護連合や環境省のレッドリストでは「絶滅危惧II類」に指定）として国際的に保護が進められているツルです。

出水平野は古くからナベヅルが渡来しており（一番古い渡来記録は昭和2年の440羽）、その後、徐々に渡来数が増加し、地元の保護活動もあり、現在では一万羽を超えるまでになりました。しかし、一箇所に集中して越冬することの問題点（伝染病などの蔓延による大量死や、農業被害の大規模化など）が明らかになり、近年は高病原性鳥インフルエンザの発生もあり、環境省を中心に、越冬地の分散化の取り組みが始まっています。このような背景を受け、国際的な保護の枠組みを作っていく目的で今回の国際シンポジウムとワークショップが開催されました（出水市・出水市教育委員会主催）。1月17日からワークショップが始まり、日本・中国・韓国・ロシア・アメリカの研究者や保護関係者が各国の状況を報告し、意見を交わしました。その一部をご紹介いたします。

今回は韓国からの参加者が多く、特に韓国各地の様子が報告されました。韓国はマナヅル、ナベヅル、タンチョウなどの渡りの中継地であり、越冬地でもあります。日本では出水平野にマナヅル、ナベヅルが一緒に越冬していますが、韓国ではマナヅルの越

冬地は韓国北部のイムジン川流域、ナベヅルの越冬地は韓国南部の順天（スンチョン）湾と分かれています。

マナヅルが越冬する韓国北部は北朝鮮との国境があり、非武装地帯として人の立ち入りが制限されています。その結果、豊かな自然も残されており、マナヅルのほか、タンチョウやガン類の越冬地にもなっています。近年は1,500羽程度のマナヅルと700羽程度のタンチョウが越冬しています。マナヅルの越冬数は増加傾向にありますが、タンチョウは逆に減少しているということです。近年ではこの地域でも開発が進み、ツルにとっては環境が悪くなってきているようです。

ナベヅルの越冬地の順天湾は二つの半島に囲まれ、流れ込むトンチョン川の河口には広大な干潟が広がる、豊かな自然が残る湿地です。20年ほど前からナベヅルが越冬するようになり、今では600羽を超えるまでになっています。地元でも湿地の保護やエコツーリズムに力を入れ、さらに多くのナベヅルが越冬するようになるのではないかと期待されているということです。

中国からはナベヅルの繁殖地で研究されている方が、標識調査やツルの捕獲方法について話をされました。タンチョウと同様にナベヅル、マナヅルも標識を付けての調査が行われています。

出水では47年間にわたって標識ツルの観察を続けられている西田智さんという在野の研究者がおられ、今回、その貴重な研究記録の一部が報告されました。マナヅルで27年以上、ナベヅルでは29年以上生きたツルがいたということです（標識を付け

た時にすでに成鳥なので、正確な年齢はわかりません)。長い間、同じつがいでいることが確認できた一方、離婚したツルもいくつか見つかったということです。出水市ツル博物館でも、ツルの行動調査を行っており、一日のツルの利用環境の変化などがわかってきました。また、渡来数の調査も継続して行っており、近年、マナヅルの渡来時期が遅れてきていることでした。中継地の韓国の環境変化や、近年の気候変動（温暖化）に関連しているのではないかという興味深い報告もされていました。

もうひとつのナベヅルの重要な越冬地である、山口県周南市（八代盆地）の保護担当者からの報告もありました。八代では渡来数が減ってきており、渡来しなくなるのではないかと心配されています。現在、越冬環境の改善のほか、出水から保護されたツルを移送して、環境に慣らした後に放つという、再導入策も取られていますが、放したツルが翌冬に戻ってくる例は、まだ確認できてないそうです。一度、減り始めると、再び増やすのは難しいことと感じました。

18 日午前中にはワークショップが引き続いて行われ、昨日の報告に基づいて、活発な議論が行われました。午後にはシンポジウムが行われ、約 400 人の聴衆の前で、「北東アジアにおけるツル類の現況と課題」について日本、ロシア、中国、韓国の関係者が話をされました。今後、ナベヅル・マナヅルの保護のために国際的な協力も進むと思われます。

18 日にはツルのねぐら観察も行われました。まだ、暗いうちにホテルを出発し、東干拓と荒崎のふたつのねぐらを観察しました。数千羽のツルがねぐらから飛び立つ様子はとても壮観な光景でした。

釧路地区でのナベヅルの発見と越冬について　西岡秀観

2013 年 11 月 30 日、白糠・音別地区のタンチョウ調査中に、釧路市音別町のデントコーン畑刈り跡で、ナベヅルの成鳥 1 羽がタンチョウに混じって落ち穂を食べているのを発見しました。

11 月 26 日頃に発達した低気圧が北海道を通過したので、もしかしたらそれに乗せられて辿り着いたのかもしれません。ナベヅルは、その後も音別町に居座り、給餌場に来てタンチョウと一緒にエサを食べて越冬しました。

タンチョウの群れとナベヅル（11 月 30 日撮影）

2014 年 3 月 10 日まで音別町に居たことが確認されています。給餌が終わってタンチョウが繁殖地等に戻る時、ナベヅルが若いタンチョウと一緒に周辺で行動するのか、帰巣本能で大陸の方に戻るのか興味が尽きません。今後目撃情報がありましたら、ご一報ください。

2 月 3 日撮影

冬季総数調査が行われました　　貞國利夫

本年度も１月31日から２月９日まで冬季タンチョウ総数調査が行われました。１月３１日は十勝地域、２月１・２日は阿寒町、３日は音別町、４日は根室地域、６日は標茶町中茶安別、７日は茅沼地域、８・９日は鶴居村で終日調査を行いました。調査中はやや天候が荒れる時もありましたが、概ね穏やかな天気が続きました。また、今年は積雪が平年よりも少ないこともあり、畑の地面が見えていることが多かったと思います。そのため、給餌場以外の場所で採餌をするタンチョウの存在が随所で見られ調査員を悩ませました。特に音別町においてその傾向が顕著に見られ、給餌場の集まりが悪いために人員を周辺へ捜索する側に割くことがありました。

また、私はカウント調査の役割の一つ、副班長を６日の標茶町中茶安別にて初めて担当させて頂きました。給餌場に来たタンチョウの飛来や飛去などの動向を記録する書記が主な内容です。書記と聞くと、わりと楽なイメージを持たれるかもしれませんが、調査に参加された方ならお分かりの通り、非常に神経を集中しなくてはいけないものです。記入項目は給餌場における30分毎の気象や５分毎の総数カウントや幼鳥カウント、もちろん給餌場の飛来・飛去も記録しますのでかなり多くの項目を書いています。タンチョウが給餌場へ来るまでは比較的余裕があるのですが、徐々にタンチョウの飛来数が増えてくると､飛来の度に記録をしなくてはいけません。また、その方角・内わけ（成鳥・亜成鳥・幼鳥）も必要です。天候や周辺の餌場環境等によって各給餌場の飛来総数のピークに差はありますが、概ねどこも午後２～３時だったと記憶しています。ピーク時の給餌場はタンチョウが入り乱れており、餌を食べるために頭を下げたり上げたりするので、私はいつもその光景を見てまるで「もぐらたたき」のようだなと思ってしまいます。総数・幼鳥カウントの方々はこの時が最も大変な時間です。

さて、ピークが過ぎればあとはねぐらへ帰るタンチョウを記録していきます。大人しく少しずつ帰っていってくれれば良いのですがそうはいきません。たいてい一気に飛んで行ってしまうことが多いのです。タンチョウが給餌場から飛去を始めたら、机に座っている書記係は下を向いて用紙へ記入する準備を始め、飛来・飛去担当の調査員がタンチョウの動向を掴み終わってからその報告を受けるので、書記係は一度にどれだけのタンチョウが飛去していったか報告を受けるまで正確には分かりません。しかし、調査員の驚きの声や諦めたような声などの反応から、「あ～一気に飛んで行ったのだな…」と察することができるのです。調査終了時間は午後５時頃で、その時間までには給餌場からタンチョウはいなくなっていることがほとんどですが、まだ餌を食べ足りない個体が残っていることがあります。

ある給餌場では、成鳥２羽幼鳥１羽の家族の中で幼鳥ではなく片親だけが餌をひたすら食べ続けていました。幼鳥自身はお腹が満たされていたのか、体の方向はねぐらへ向けて、その片親をチラチラ見ており、帰りたそうな様子でもした。その時間になると、寒い日はマイナス１０度を下回ります。その時の調査員一同、「早くねぐらへ帰って下さい…」と思っていたことでしょう。その家族はしばらくして給餌場から飛去し、その日も無事調査は終了しました。書記係は自分の記入ミスによって調査の結果も変わってしまいますので、記入の早さを意識しつつ確実に記録しなくてはならず、なかなか大変な作業でしたがとても良い経験となりました。

今年の調査は、のべ156名のボランティアの方の協力で行われました｡初めて参加された方からは、「寒い調査だけれど優雅な姿とタンチョウの現状を知ることが出来る楽しい調査でした｡」という意見を聞き、調査に参加していただいた感謝とともに、この調査の意義も再確認しました。調査にご協力くださった皆さま、ありがとうございました。

十勝の越冬地を調査しました　　冨山奈美

環境省の生息地分散に関わる保護増殖委託事業で、十勝の越冬地調査に参加しました。

ここ 20 年で生息数の増加とともに、これまで繁殖期にしか見られなかった十勝でも、徐々に越冬するタンチョウが増えています。今年の十勝の越冬数は、過去最大の 72 羽が確認されました。

例年 12 月初旬には十勝川下流域が全面凍結しますが (この頃、最低気温が－ 10℃以下になります写真 1)、今年は暖冬で翌年 1 月中旬まで気温が下がらず、積雪も少ない状況でした。また 2 月中旬には寒さも緩み、一気に雪解けが進みました (写真 2)。

写真 1　凍っている川の様子

写真 2　2 月には融けました

十勝では、大規模な給餌はしていません。越冬しているツルたちは、主に不凍結の河川や牧場の堆肥、デントコーンの刈跡などを利用していました (写真 3)。

また、観察記録を基に実際に利用した河川の中に入って現地調査もしました。ツルの利用を確認してから、現地に入って調査しています（写真 4)。この川もパッと見には水路のような川ですが、小魚が多数見つかりました (写真 5)。

写真 3　デントコーン刈跡で餌をとるツルたち

写真 4　ツルの利用状況を確認

写真 5　現地調査の様子

冬の調査は、見た目以上にハードです。時に地吹雪に見舞われたり (写真 6)、50 ～ 60㎝はある積雪の中を歩いて川に入るため、結構な体力を使います。しかしながら現地に入らないと気付かない発見も多く、楽しい調査となりました。

まだ十勝では、釧路地方に比べると、タンチョウ

写真６　地吹雪に見舞われる

と農家との軋轢はそれほど大きくはありません。今後、どのようにタンチョウの生息域を広げていくべきかを考えていくうえで、重要な調査になったと思います。

最後に、調査した人たちの雄姿を披露いたします。（はた目にはかなり怪しい姿ですが。）

写真７　怪しい調査隊

「湿地之神」三部作が完成しました　　井上雅子

地球環境基金から助成金をいただき３年計画で作成してきました「湿地之神」シリーズの第３部ができあがりました。おかげさまでこれですべて完成したことになります。

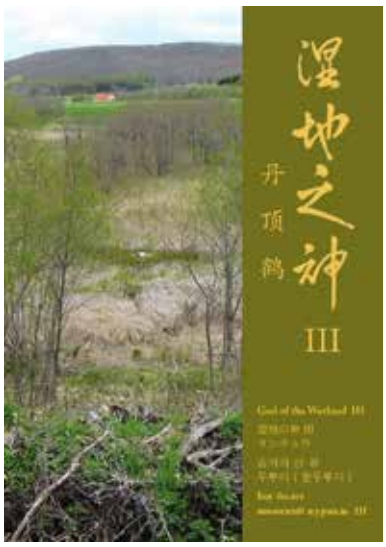
今回は、タンチョウが今どんな環境で暮らしているのか、乾燥化や野火、後を絶たない密猟、人間の生活圏との接触から起こる事故や人馴れの問題。一方で課題解決のための努力として、環境調査や行動調査の実施、野生動物本来の生活を取り戻すための試みや国際協力など、私たちが取り組んでいる活

繁殖地の悪化を伝えるページ

動についてもまとめました。

この３部作は、大人が子どもたちサポートする教材として使うことを前提としているため、説明文をほとんどつけていません。大陸と北海道とでは、タンチョウを取り巻く環境も抱えている問題も異なりますので、こちらが意図していることを正しく伝えるためにはどうしたらよいのか、前２部とは違った編集の難しさがありました。

お気づきの点がございましたら、どうぞお知らせください。ホームページ上でも公開していますが、ご希望の方は送料（切手 82 円分：4 冊まで同額）を同封のうえ必要部数をお知らせください。



富山県に出現したタンチョウの顛末記　百瀬邦和

昨年末、富山県黒部市にいらっしゃる鍛冶さんから黒部市内の水田にタンチョウの幼鳥が飛来しているとの連絡をいただきました。鍛冶さんは以前環境省釧路自然環境事務所の所長をされていた方で、釧路事務所から転勤された後、海外を含む何箇所もの任地で仕事をされた後に環境省を退職されていますが、今もタンチョウについて気にかけて下さっているのです。

このタンチョウについての詳しい状況について、日本鳥類保護連盟理事で同富山県支部長の湯浅純孝氏を鍛冶さんから紹介していただき、観察記録の詳細を知ることができました。湯浅氏からの連絡によれば、初記録は 11 月 13 日頃に富山県朝日町三枚橋で地元の方が目撃されたそうです。その後県内の入善町、黒部市生地、同市飛騨一円の地域に定着していたようで、時には佐渡から飛来滞在しているトキと一緒の水田で見られたこともあったそうです。

このまま春まで無事に越冬してほしいと湯浅氏とも話していたところでしたが、年が明けた 1 月 30 日に湯浅さんから例のタンチョウが死亡したとの連絡を受けました。湯浅氏によれば、発見した場所の近くには送電線があることから電線事故の可能性が高いのではないか思うが、出血が激しいのでキツネかタヌキに食害された可能性も考えられるということでした。また、地元の富山県としてはこの斃死体の扱いについては特に興味を示しておらず、通常では廃棄される可能性があるので、タンチョウについて試料を収集している釧路で必要ならば、環境省を通せば試料として提供することは可能だということでした。さっそく環境省釧路事務所と相談して、「ぜひ送っていただきましょう」ということになりました。試料の送付にあたっては役所間の縦割り？の壁があり、その際にも湯浅氏に御尽力いただきました。タンチョウ滞在中の観察から事故後の処置に関して等、湯浅氏には非常に積極的に活動して下さり感謝しています。

釧路に届いたこのタンチョウは、道内で死亡したタンチョウについて病理解剖検査を行っている釧路市動物園で剖検、当会理事でもある寺岡酪農学園大学教授の研究室で DNA 鑑定をした結果、右足骨折による外傷性ショック死、性別はオス、大陸由来の可能性が高いという結果が出ました。

それにしても、この幼鳥が 1 羽きりで黒部市までたどり着いたいきさつはどのようなものだったのでしょうか？

撮影：湯浅純孝氏

〈活動記録〉（2013 年 12 月～ 2014 年 3 月）

12 月 4 日　池田河川事務所にて情報交換会 (百瀬邦和)
12 月 6 日　北海道大学（札幌）で開かれた環境省環境研究総合推進費のアドバイザリーボード会議に出席（百瀬邦和、正富欣之）
12 月 9 日　会報 Tancho20 発送
12 月 12 日　北海道根室振興局農村振興課と平成 26 年度新規着手希望地区の環境に係る事案について（タンチョウに対する環境配慮事項）協議
12 月 13 日　運営会議 (9 名出席)
1 月 8 日　大樹町で開催予定のタンチョウシンポジウムの打合せ（百瀬邦和）
1 月 10 日　運営会議 (11 名出席)
1 月 13 日　総数調査に向けた勉強会（於：釧路市民活動センター）
1 月 17 日～ 18 日　鹿児島県出水市で開かれた国際ツルシンポジウム＆ワークショップに出席（百瀬邦和、百瀬ゆりあ）、日本ツル・コウノトリネットワーク総会に出席（百瀬邦和）
1 月 23 日　大樹町でタンチョウシンポジウムの第 2 回打合せ（百瀬邦和）
1 月 31 日～ 2 月 9 日　総数カウント調査
2 月 14 日　運営会議 (7 名出席)
2 月 25 日　豊頃町で傷病タンチョウの保護収容に協力（百瀬邦和、榊原源士）
3 月 1 日　大樹町で開かれたタンチョウ保護増殖検討会、シンポジウム「十勝発　ツルと人との新しい関係」で講演（百瀬邦和，正富欣之）
3 月 6 日　大樹町の一般社団法人湿原研究所主催の柏林講座で講演（百瀬邦和）
3 月 8 日　東邦大学理学部野生生物保全センター設立記念シンポジウムで講演（百瀬邦和）
3 月 14 日　運営会議 (9 名出席)
3 月 20 日　北海道横断自動車道（阿寒～釧路）タンチョウ保全検討会に出席（百瀬邦和）、
3 月 20 日　釧路湿原自然再生協議会土砂流入小委員会に出席（井上雅子）

今冬は積雪が少なく、越冬地の鶴居でも、給餌場ではなく細い川などで餌を採る光景が多くみられました。しかし、２月中旬に全国を襲った暴風雪は、ツルの暮らしにも影響を与えました。餌場となっていた細い川がふさがってしまったのです。また、厳冬期、繁殖地付近で越冬していたツルもいましたが、ねぐらとなっていた水辺がふさがってしまったようで、２月下旬になって越冬地へ移動してきました。

家にこもっているだけだった人間とは違い、野生生物は自らの命をつなぐため、暴風雪にも耐え、その後の餌場を求めて飛び立つ知恵と力をもっているのですね。

やっと、雪解けがすすむ季節になりました。

＜会員（3 月 19 日現在）＞
運営会員：27 名、個人サポート会員：152 名、団体会員：15 団体

Red-crowned Crane Conservancy (RCC) newsletter　TANCHO
Twenty-first issue　March 2014

＜表紙写真＞
「親鳥と一緒に飛べるのはいつまでかな？」
（2014 年 3 月 15 日　森竹祐 氏　撮影）

特定非営利活動法人
タンチョウ保護研究グループ
（編集：松本文雄）
〒 085-0036
北海道釧路市若竹町 9 番 21 号
Tel/Fax 0154-22-1993
e-mail: tancho1213@pop6.marimo.or.jp
URL: http://www6.marimo.or.jp/tancho1213